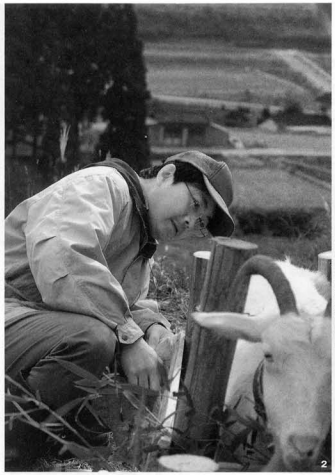
日本の食と農を歩く 8

森と棚田で体験し、考える——熊本・愛林館のエコロジカルな村おこし

面積の97%が森林、3%が棚田という典型的な山村である熊本県水俣市久木野地区に、エコロジー（風土・循環・自立）に基づく村おこしを目的とした施設、「愛林館」がある。村おこしの主役は、元気いっぱいの60、70歳代。使命感・達成感・実利の3要素があるのでボランティアも集まる。棚田と人工林を2000年後の世に伝えることが目標という館長の沢畑亨さんを訪ね、地域の特性に根ざした愛林館の活動を伺った。

取材・文／宮脇慎司
撮影／旭川金星



1 塞川集落の棚田。2 やぎの乳を搾る沢畑さん。耕作放棄田にやぎをつなぐと、みごとに雑草を食べ尽くす。棚田保全のかわいい秘密兵器。

高齢者が生き生きと暮らせる村づくりを

熊本県南端の山間部に、何百年にもわたってみごとな棚田の景観を維持している水俣市久木野地区がある。市が建設・所有し、委託を受けて久木野地域振興会が管理・運営を行なう「愛林館」は、1994年に落成し、館長を全国公募。25人の応募者の中から選ばれたのが、沢畑亨さん（46歳）である。東京大学農学部に在学中から地域活性化をテーマとした研究調査を各地で行ない、西武百貨店に勤務後、コンサルタント業を経て、妻子とともに出身地である熊本県に戻ってきた。「自由飲酒党総裁」を自称する大の焼酎好きだ。

「ここのような山村では、人口が昭和30年ごろと比べて3分の1ぐらいに減ったといわれるんですよ。でも日本史上でもまれな、戦後の人口バブル期と比較しても意味がありません。むしろ現在の人口が適正と考えるのが妥当です。子どもが増えないのだから、老人天国になればいい。実現すべきは老人が生き生きと暮らせる村づくりです」

愛林館では「エコロジー（風土・循環・自立）に基づくむらおこし」をテーマに、さまざまな活動を行なっている。館長である沢畑さんは、地域の人々に小金を稼ぐ機会を数多く提供することも地域活性化の一つだと考えている。工場勤務のパートなどではなく、地域の風土に立脚した活動によって稼いでもらいたいと思うからだ。

棚田の石垣積みに魅力を感じて集まる

そのためのとり組みの一つが、近年増えつつある耕作放棄田を大豆に転作する「大豆耕作団」という田園プロジェクトである。40平方メートルあたり5000円で会員を募り、収穫物を提供するトラスト制度だ。大豆を栽培するのは地域の人で、お金を払った会員は種まきや収穫などの農作業に参加できる権利を持つ。

「大豆は日本の食生活の中では重要な作物ですが、自給率が低い。だからどうしても作りたかった。一口あたり3000円は作る人に渡るしくみで、まったく収穫できなくても支払われるから、悪い額ではありません」

天候に左右される農業だから、実際には一口あたりの収穫が1キログラムに満たない年もあったが、それで不満をいう会員は一人もいなかった。だれもが楽しく参加して、収穫を喜び合えるアイデアがここにはあふれている。

棚田が多い久木野地区では、石垣積みが重要な仕事だ。この地区の70歳代以上の男性であれば、たいがいだれでも石垣積みができる。しかしその技術が若い世代に継承されていない。そのため愛林館では、受講生を集めて、壊れた石垣を修復する「石垣積み教室」を毎年1週間の日程で開催している。

「ああいう昔の石垣は、本当にきれいやけん、残せばよかった」

講師を務める石垣積み名人の寒川敦さん（72歳）は、江戸時代からあったという高さ3メートルを超えるそれはみごとな石垣を、数年前に基盤整備事業で解体してしまったことを今でも悔やんでいる。

1 大豆林作団の収穫。2 自慢の棚田を見つめる寒川忠行さん。昔は、棚田の水路に沿って蛍の光の大河ができた。その明かりを頼りに家路につけたと語る。

なくして初めて気づいた棚田の本当の価値を伝えるために、技術を伝える言葉にもおのずと熱が入る。とにかく石の積み方の話になったら止まらないのだ。

「石にはツラがあって、見つけたツラとツラを合わせてつぐのになんともいえん楽しみがあるんです」

そんな手作業の石積みの魅力にとりつかれて、毎年遠くからやってくるリピーターも多い。

「こんな田舎の山ん中ですから、ちょっと壊れたとこでもつぐのがたいへんですが、都会から来て、女の人も来て、石積みを覚えようなんていう人がいることにびっくりしました」と、寒川さんは自分の技術が継承されることが楽しくてしかたがない様子だ。

棚田の魅力を伝えるために沢畑さんはさまざまなイベントを企画している。その一つが、竹筒とバイオディーゼル燃料で作った1500本の松明を、田植え前に水を張った棚田群に灯す「棚田のあかり」である。ステージは、棚田百選にも選ばれた寒川集落。夕闇迫るころ、ボランティアによって点灯された炎のゆらめきが、600枚の棚田の水面に映るさまは幻想的という言葉に尽きる。初年度は沢畑さんが集落に場所だけ借りて実施。次年度からは愛林館と寒川集落の共催になり、3年目の2007年は人口60人の寒川集落に400人ものギャラリーがつめかけた。

「館長を手伝うという気持ちではなくて、やっぱり自分たちが主体となってやらんばいかんという考え方にみんながなりました」と、地域のまとめ役の寒川忠行さん（70歳）は、自分たちの手でやり遂げたことの達成感を語る。

「たいへんはたいへんでした。でも、きれいかねえっていって人も寄ってこらすと、集落の人もみんな感動したじゃなかですかね」

全部の田んぼに明かりが灯らないと値ちがなくなるからと、みんなで協力し合って耕作放棄田の草を払い、水をためた。せっかく水を張ったのだから田植えもしようということで、米ができた。

草刈り、間伐、植林で広葉樹の森をつくる

棚田の水は、森からやってくる。愛林館の活動のもう一つの柱にこの森の保全がある。そもそも森林は、水源涵養、表土保全、山崩れ防止、景色の改善、生物多様性の回復などの公益的な機能を担っている。しかし人工林では、間伐などの手入れをきちんと行なわないとその機能を果たさない。森が大事にされていない現状を憂い、その啓蒙活動として合宿形式での草刈りや間伐、植林をなっている。

新たに皆伐された山は、広葉樹を中心にした自然の森に近い形に戻すのがいいと沢畑さんは考えている。最初にそのための植林をしたのが96年。常緑広葉樹の造林は全国的にも少なく、文献もない中の手探りの出発だった。

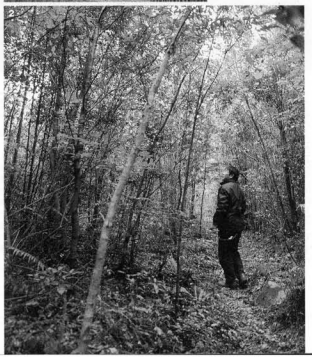
10年余りたった現在、沢畑さんに連れられて行ったその山は、多様性のある樹木が生い茂るみごとな森になっている。木材が切り出されたはげ山がここまで回復するのかと正直びっくりした。こうして愛林館が植林した森は合計21ヘクタールにも上るという。

「山の活動については、ボランティアといっしょに森づくりをしていく技術を確立したのでもうだいじょうぶ。森の保全には自信があります」

身土不二の理念のもと食の知恵を伝える

久木野の森がはぐくんだ水は、田畑を潤しながら不知火海に注ぐ。その連なりが生み出す食を通したさまざまな試みを、愛林館では「身土不二（しんどふじ）」の理念のもとに行なっている。地元の素材を利用したそば、うどん、豆腐、こんにゃく作り体験の講師を、地域の婦人グループが担当する。

活動の中心的な役割を担う小島トシエさん（77歳）のお宅を訪問すると、すぐに自家製の漬物が次から次へと並べられた。もちろん



1 皆伐された山頂。間伐されていない人工林の断面からは、杉の育成が悪く、森が荒れているのがわかる。2 いろいろな広葉樹を植林してよみがえった水源の森。

1 愛林館。おいしい激辛タイカレーと、マイルドなインドカレーが食べられる。2 小島トシエさんと豊吉さん夫妻。外国から来たお客さんを泊めることもある。

遠慮なくいただく。うまい。「このおばちゃんたちは、全部自分で作った作物を料理しているから究極の身土不二です」と沢畑さんもほおばりながらほほえむ。

「人が来てくれて、私たちもその中に入って、初めて自分たちが暮らしている土地のすばらしさを知った気がします。いちばん感謝しているのは、人と人との触れ合いに出合ったこと。食を通して世界じゅうの人と話ができるなんて、思ってもみませんでした」

料理を食べてくれる人のおいしそうな顔を見ることが、トシエさんのいちばんの生きがいだという。地域の特性に根ざした食の世界を発展させて、07年から沢畑さんは「棚田食育士」の認定講座を始めた。きっかけは冗談からだったが、内容はいたってまじめだ。

「ここで生活している人には、棚田も森も一体のもの。だから田んぼも森も、さらに食べ方までも連続して考えましょうというのが『棚田食育士』のコンセプトです」

07年に実施された初級の講座には、定員いっぱいの15人が参加、栄養士、家庭科の先生などのプロが顔をそろえた。棚田を見て歩くことから始まり、豆腐を作り、旬の野菜で夕食を作った。そして食育についてのアイデアを発表し、それぞれの立場での実践を誓い合った。次の中級講座では農作業の実習を3～4回入れる予定だ。

「田植えだけで終わりというわけにはいかない。作物を育てる全体の過程をつかんでほしい」と考えて、上級では山での森づくりも加えるという。「棚田食育士というのは、田畑でとれる農産物まで扱います。まな板から先の田畑までさかのぼるのが中級。その先の森までさかのぼるのが上級です」

じいちゃんばあちゃんの喜ぶ顔がうれしい

館長に就任して13年。沢畑さんはいま自分の仕事に確かな手ごたえを感じている。以前は棚田を見に来て「いい景色ですね」で終わっていた感想が、「棚田はきれいだけれど保全もたいへんなんですね」と変化してきている。明らかに年々、理解が深まっているのだ。

最後に「村おこしとはなんですか?」と質問してみた。しかし「その質問がいちばん嫌いなので答えません」との返答。では、どんなときがいちばん楽しいですかと質問を変えると、「じいちゃん、ばあちゃんが喜ぶ顔を見ているとき。1500本の松明が灯って、『バスついてよかったねえ』って。そんなときが至福のときです」

そう静かに語りながら、また元のやさしい目に戻った。